
仮面ライダー×仮面ライダー クウガの介入&ディケイドAMW NOVEL's 大戦2011

神崎はやて

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー×仮面ライダー クウガの介入&ディケイドAMW
NOVEL'S大戦2011

【Nコード】

N6442P

【作者名】

神崎はやて

【あらすじ】

数多ある、様々な世界。

それらは互いに交わることはなく、しかしある時には、まるで湯に投じる砂糖のように溶けあう。

それは、決して交わることはない物語。

しかし彼らは事実、出会うべくしてその肩を並べる。

世界の破壊者、ディケイド。そして、古代の力？クウガ？を身に宿し、故に凄絶なる生を送ることを運命付けられた少年。

2人の物語が、今 交差する。

仮面ライダー×仮面ライダー。クロスの物語が、ここに幕を開ける。

Chapter 1 Side: KUUGA (前書き)

この小説は、綾崎先生の作品『魔法少女リリカルなのは』仮面ライダークウガの介入』と、私、神崎はやてが連載させていただいております『仮面ライダーディケイド After the Movie War』のクロスオーバー作品です。

クウガの介入を知らない読者様にもわかりやすい描写を心がけておりますが、先にそちらをお読みになってからの方がよりお楽しみいただけます。ここに記しておきます。

では、始めます。

Chapter 1 Side: KUUGA

「ロストロギア、だあ？」

近未来的なビルが連なる、まるでSFの世界から飛び出して来たような町。

そのビルの1つの中にある1室で、少年の呆れたような声が響き渡った。

彼の視線の先には、虚空に浮かぶモニターのようなもの。

本来ならば、何もない場所にモニター画面が現れるなど有り得ない。それこそ、超科学や魔法と呼ばれる、超常的な御業でもなければ。

しかし不可思議ながら、これはその1つなのである。

結果から言えば、これは魔法。

しかし魔法といっても、ファンタジックな要素は薄い。

この世界での魔法とは、式だ。

デバイスと呼ばれる演算装置のサポートを得て、自らの魔力をその演算のままに放出、魔法として顕現する。

こうなれば、魔法というよりは魔法科学、それよりも超科学と呼称した方が、呼び名としては正しいとする者も多いだろう。

だが、それが既に魔法という定義を確立されたものであることも事

実であり、この世界の住人はそれをそうだと信じて疑わない。

そして、そのような不可思議な存在から生み出された、薄型テレビも真つ青な薄っぺらいモニターに映る黒髪の青年は、少年のあからさまに嫌そうな態度に苦笑いした。

『そんな顔をするな。先方が、君に頼みたいと言ってきているんだ。光栄なことじゃないか、小野寺少将殿？』

「つつさい」

茶化す青年の声をぴしゃりと撥ね退け、少年
小野寺 駿
介は目の前のデスクに頬杖をついた。

ロストロギア。またの名を、古代遺失物。
無数に存在する世界において、様々な超常技術によって生み出された、叡智の結晶。

その形状や性質は様々で、オークションなどで転売されるような比較的安全なものから、厳重管理しなければならないほど危険なものまで、その種は様々なものがある。

だがそもそも、駿介の率いる部署は仮面ライダーの敵
怪
人達に対抗するために造られたものだ。
ロストロギアを回収するために造られた部署は別に存在するし、わざわざ彼が外向く必要性は薄いのである。

だがそんなことよりも、駿介には青年が言った、？先方？という言葉
葉が気にかかった。

「先方って、誰だよ？」

『ダムド!! バツカナー中将だ。君も、名前くらいは聞いたことがあるだろう?』

「ああ、あの胡散臭え親父か……………」

いかにも脂ぎったその気色悪い顔を思い浮かべ、駿介は顔をしかめる。

名前くらいも何も、駿介は実際レヴィン中将には会ったことがあるのだ。

それはちょうど、彼と中将の部隊の合同演習の時、幾度となく彼らの持つ? 仮面ライダー? の力について訊かれた。

結局詳しいことは知らぬ、と繰り返し、断固として教えることはなかったが。

「まだ諦めてねえのかな、あの親父……………」

『君達の持つ、仮面ライダーの力は未知数だ。上としては、ぜひともその力を戦力として加えたいのだから』

「いくら言われても、渡すつもりはないんだがなあ……………」

駿介は苦笑いする一方で、上がライダーの力を欲しがる理由を、なんとなくであるが推測していた。

青年の言ったとおり、仮面ライダーの力は未知数だ。

さらに、魔導師
することは難しい。

魔法を使役する存在では、怪人に対抗す

現に、彼の知り合いのEース級魔導師ですら、怪人には太刀打ちできなかつた。

だが、仮面ライダーにはそれが出来る。

怪人を圧倒、倒すことさえ可能なその戦闘能力は頼もしい。
が、それ故、それが集中している彼の部隊は、自然と強大な力を持つこととなる。

上層部は、恐れているのだ。

力が、彼に集中してしまうことを。

そして隙あらば、それを自らの力として取り込もうと、虎視眈々としている。

「ま、望むところだけだな」

『？ 何がだ？』

「ああ、いや、こっちの話だ」

いつの間にか声に出ていたのを慌てて訂正すると、駿介は返事を返す。

「解った。今から向かうと伝えてくれ」

『了解だ。……………それとな、駿介』

「ん？ どした？」

『たまには、皆で食事でもどうだ？ はやても会いたがっているし』

「あ……………」

冷や汗が出るのを感じながら、駿介は言葉を濁す。

はやて、とは彼の恋人だが、確かにこここのところ、仕事が忙しくてなかなか会う機会がなかった。

いや、正直なところ、恐かったのかもしれない。

最近、彼は新しい力に覚醒した。

だがそれは、強大である一方、暴走の可能性を秘めた危険な存在でもある。

もう飲み込まれない自信はあるが、それでも巻き込みたくはなかった。

それが解っているのか、青年はモニター越しにふう、と溜め息をつく。

『まあ、いいさ。彼女には後で僕の方から伝えておこう。よろしく言っていた、とね』

「……………すまん」

『気にするな、君らしくもない。さて。それじゃあ、伝えたからな』

「ああ。サンキュ」

言い、モニターを切る。

1人の部隊長室に、再び静寂が訪れた。

唐突に、顔を抓る。

「……………俺、顔に出易いのか？」

「何が？」

突然傍から声がかかり、駿介は椅子から転げ落ちそうになりながらそれを必死に堪え、声の主を睨みつける。

「……………嶺。いつからそこにいた？」

「いつからって、たった今。ほら、コーヒー持ってきたよ」

「お、おう」

戸惑ったように返事を返すと、声の主である少年

神崎

嶺は、屈託のない満天の笑顔を浮かべ、コーヒーをデスクにそっと置いた。

まるで女の子のような可憐な美貌を持つこの少年はこう見えて、駿介の部隊のNo.3。外見や、普段の立ち振る舞いとは裏腹に、静かなる強大な力をその身に宿した、部隊のエースの1人だ。

尤も、駿介の部隊に落ちこぼれなど、1人としていないし、彼自身そうは思っていないが。

嶺の淹れてきたコーヒーを飲み、ほっと一息つく、思いの外頭が冷えてきた。

「ねえ駿介。さっきのって、クロ兄だよね？ 何か用事？」

嶺が親しげに、先程のモニター通信の相手であった黒髪の青年、クロノⅡハラウオンについて問う。

これだけ彼がクロノに対して親しげなのにも、理由がある。

というのも、彼とクロノの義妹であるフェイトⅡⅡハラウオンとは恋人同士であり、その縁で彼もまたクロノとは親密な間柄にあるのである。

ああ、と相槌を打ちながら、思いついたように駿介は訊き返す。

「なあ嶺、今日暇か？」

「午後からなら空いてるけど……どしたの？」

そうきよとんとしながらトレイを片手に小首を傾げる嶺に、「一挙一動がそんなだから、女の子みたいだって言われると思うんだがなあ……」と見当違いなことを考えながら、駿介は続ける。

「いや、ちょっと上からロストロギアの視察に来てって言われてるな。一緒に来て欲しいんだよ。ほら、覚えてるだろ？ レヴィン中

将

「あー、あの油ギツシユなおじさんね。……………なんでだろう。あの人が絡んでるっただけで、また面倒なことに巻き込まれそうな予感がするの……………」

「奇遇だな。実は俺もだ」

2人して冷や汗をかきながらひとしきり苦笑すると、嶺は元氣よく頷いた。

「うん、解ったよ。じゃあ、お昼食べ終わったら、転送ポートにいればいいかな？」

「ああ」

解った、じゃあね、と部屋を出て行く嶺に手を振ると、再び静かになった室内で、駿介は椅子にもたれかかった。

嶺の淹れてくれたコーヒーの水面に、自分の顔が歪んで映る。

「はやて、心配してるかな……………」

自分で言うっておきながら、あの優しい少女のことだから、きっと心配しているであろうことを想像し、苦笑した。

コーヒーを啜る。

「……………苦い」

どうやら、砂糖を入れ忘れらしい。

苦さに休む気も薄れ、駿介は再び、中断していた書類の整理に戻るのであった。

「……………というわけで、やってきました本局っ」

「誰に言ってる、誰に」

「ああ、いや、ただ言ってみただけ」

無邪気にも手を振り上げながら、まるで子供のようにはしゃぐ嶺に、駿介が呆れたようにツツコミを入れる。

時刻は午後1時。

昼食を終えた駿介と嶺は、管理局本局の前までやってきていた。

本局。

管理局の中枢であり、その粋が集約された場所。

ここに、今回2人が出向いた理由となる、ロストログアが保管されているのだ。

「んじゃ、行くか」

「うん！」

レッツゴー！という声を背に、駿介は本局へ足を踏み入れた。

受付に聞くと、件の主であるダムドはどうやら外出中のようだ。

もうじきに帰ってくるということだったので、仕方なく2人はロビーで待つことにした。

「あつちから呼んどいて外出中とか……………ありえねえよ、あのおっさん」

椅子にゆつたりと腰を降ろす2人の周りを忙しなく飛び回りながら、彼の相棒である小型の金色をした蝙蝠型モンスター、キバットが、そう愚痴を零す。

キバットバット？世。

蝙蝠型のモンスターの一族、キバット族の血を継ぐ者だ。

何せキバの装甲となるキバの鎧を内包しているのが彼なのだから、彼がいないことには変身することすら出来ない。嶺の変身する仮面ライダーキバには、なくてはならない存在だ。

そんなキバットの言葉に、嶺は苦笑いして答える。

「仕方ないよ。呼ばれたのはこっちなんだし」

「いやな、嶺。むしろそこは、向こうが呼んだのに待たせるとは何事だ！って怒るところだと思っぜ、俺は」

「それに関しては俺もキバットに賛成だが……………お前のように苛々を撒き散らすのもどうなんだ？ こっちまで苛々してきちまうじやねえか」

「うっ……………すまん」

一応は解ってくれたようなので、それ以上の問答は止め、再び買っておいた缶コーヒーに手をかける。

すると。

「れ……………い……………?」

「わわっ!?!」

電光石火の如く現れた影が周囲の粉塵や服の裾を巻き上げながら駿介の視界を通り過ぎ、嶺に飛びついた。

「な、何だ!?!」

「放つとけ、駿介。……………いつものことだ」

「それってどうい……………ああ、なるほど」

キバットの言葉に、どうということだ、と質問しかけ、しかし言いながら動かした視線の先に見えた光景に、納得したように頷いた。

「な、凧!? 何でこんなところにいるの!?!」

突然のハグに真っ赤になってあたふたするばかりの嶺に、今まさに

彼の胸に頬を擦り寄せている少女、凧は、幸せそうに緩みきった顔で、息を吐きながら答える。

「嶺を追ってきたに決まってるでしょー はふうふう、やっぱり嶺には私がついてないとね」

「待て待て待て待て。お前、仕事はどうした」

「仕事なんて、巧達に押し付……ゴホゴホ、頼んできたもーん」

「今、明らかに押し付けてきたって言いかけたよな、お前!？」

キバットの鋭いツツコミに、凧と呼ばれた少女はちゃっかり嶺を抱き絞めるのを止めないままに、頬を膨らませる。

日向 凧。駿介の部隊の1人である。

何がきっかけか嶺に酷く惚れているらしく、今回のような、本人曰く?スキンシップ?を図って近づいては真っ赤になる嶺、という光景は、駿介の部隊に関わる者には見慣れたものであった。

「ハハハ、だが、程々にしとけよ? また雷神がお怒りになるからな」

「えー、いいじゃん。こんなところにタイミングよく来るはずが……」

「何、してるの……?」

来るはずがない。

そう言おうとした風だったが、背後から聞こえてきた、まるで地獄の底から聞こえてきたような声が響き、体を震わせる。

否、彼女だけではない。

その場の誰もが この世界のチートオブチートこと駿介ですら、その言い知れぬ迫力に恐れをなし、震えていた。

彼らの視線の先には、俯き、わなわなと体を震わせる、金の長い髪をした少女が立っていた。

「ふえ、フェイト……………」

「ねえ嶺、これはどういうことなのかな？ 何で嶺がここにいるの？ そして何で風と…………い、イチャイチャして……………」

「い、いいいいいいイチャイチャなんて、誤解だよっ！」

「え、誤解なの？」

目の前の阿修羅を静めようと全力で拒否すると、今度は眼下から潤んだ瞳が見上げてくる。

うつ、と詰まる嶺本人を他所に、風は彼の胸に押し付けていた顔を、どんとんと嶺のそれへ近づけていく。

それを、キヤーだのわーだの、明らかに楽しんでいるとしか思えない様子で、駿介やキバツト、果てには通りすがりの局員までもが、2人の様子を見守っている。

「ねえ……………どうなの？」

「あ、あの……それは、そのお……」

「ねえ………」

そして、真っ赤の嶺と、僅かに染まった風の顔の距離が目と鼻の先に迫ったところで。

「ダメ………つ………」

頭に響くほどの声量で、金髪の少女、フェイト「T」ハラウオンが叫んだ。

「駄目なの！ 嶺は私のなの……！」

「ふ……んだ。アンタのなんて誰が決めたのよ。嶺には私が一番似合ってるんだから……！」

「そんなことないもん！ とにかく、嶺から離れて……！」

「い………や………」

嶺から風を引き剥がそうとするフェイトと、必死になってしがみ付く風。

しかし、風の両腕は嶺の首をがっしりとホールドしているため

。

「あ………あが………ふ、ふだりども………ぐ、ぐるじい………」

「ま、待て凧！ 絞まつてる！ 首絞まつてるから！！」

「ふえ、フエイトも抑えろ！ お前の愛で嶺が死ぬぞ！！」

ただ傍でニヤニヤしていた駿介とキバットは、苦しげな嶺の呻き声に我に返り、慌てて引き剥がしにかかる。

2人がかりで漸く離れると、凧はびっ、とフエイトに指を突きつける。

「勝負よ！ どっちが嶺に相応しいかを賭けてっ！！」

「……………いいよ。絶対渡さないんだから！」

なんだか数年前のフエイトと彼女の親友とのやり取りを彷彿とさせる会話をし、それぞれの戦闘用ツールを構え。

「……………つて、ちょっと待て。ここでやる気か？」

「ああ、そうだった。じゃ、駿介、転送宜しく」

「……………つたく。俺はタクシーじゃねえぞ？」

キバットの言葉に少しだけ我に返った凧のしれっとした態度に文句を言いつつも、駿介は転移魔法陣を発動させる。

程なくして転移の術式の前に2人の姿が消えると、件の中心にいた嶺は、ほっと溜め息をついた。

「ふう、助かった……………」

「あはは。モテモテだな、嶺」

「ううん……………嬉しいんだけど、僕にはちょっと過激すぎるよ……………」

凧に迫られたせいか、それとも酸欠のせいか、赤くなった顔と荒い息を嶺が整えていると、

「待たせたな、小野寺少将」

突然声がかかり、2人はそちらを見やった。

そこには脂ぎった顔にちよび髭を生やした、中年の男の姿があった。

「なにやら草臥れているようだが……………どうかしたかな？」

「いえ、少し嵐が……………なんでもありませんよ、バッカナー中将」

そう、この人物こそがダムドゥバッカナー中将。

表面上は協力的な態度を示しているが、その実ライダーの情報を求めては駿介に接触を試みている男。

悪い人間ではないと思うのだが、駿介も嶺も、この男は苦手であった。

尤も、その脂ぎった顔から、大体の局員は彼をあまりよく思っていないのだが。

「ふむ、そうか。では、早速ロストログアのもとへ案内するとしよう。着いてきたまえ」

言い、歩き出す中將の後ろを、駿介と、キバツトを肩に乗せた嶺が続く。

「いや、すまないね。急な用事が出来てしまって、先ほどまで席を外していたのだよ」

「いえ、構いません。自分程度の者のために、将が都合を合わせる必要などありません」

「はは、そう言うな。何せ、管理局きつての最新鋭エリート部隊様だ。丁重に扱わなくては不相应だろう」

嫌味を言ったつもりが、嫌味で返され、駿介の顔が僅かに歪む。

相変わらず食えない。

それが、久方ぶりにダムドに会った駿介の印象だった。

「時に、よもや神崎 嶺君まで来ていただけるとは思わなかったよ。どうだね、？あの話？、考えておいてくれたかね？」

「……………秘書の話でしたら、僕より有能な美人がいらっしやると申し上げたと思うんですけど」

と、答えたのは嶺。

「いやいや、君もなかなかじゃないか。それともあれか、待遇や制服が気にいらんのか？」

「気に入る気に入らない以前に、僕は男だって何回も申し上げてるはずですよ！」

「何を言う。似合えば男だろうが女だろうが関係あるか！」

「うわ、節操ない」

「何か言ったか？」

「いえ、何も」

嶺とダムドの問答を聞きながら、またか、と駿介は溜め息をつく。

嶺が、傍からは見紛うほどの美少女に見えるという事実は、既に周知のこと。

試しにミッドチルダで行われた祭りに参加した際、軽いおふざけのつもりで彼らの仲間、門神 土が嶺を女装させてミスコンに参加させてみたところ、なんと優勝。

さすがにこれは拙いと思ったか、後で駿介の方から説明と謝罪が大い側になされたが、それが逆効果となり、嶺のことはミッド中に知れ渡るようになってしまった。

無論、そのミッドチルダに本部を構える管理局もまた、その例外ではない。

噂は噂を呼び、ついにこの人、ダムドの耳にも入ることとなった。

それからというものの、彼が嶺をスカウトする手段として、何故かこのやり取りがなされるのが通例となってしまうた。

影で？助平親父？とか、？変態？とか言われて、脂顔同様に敬遠されているのを、彼自身は知らない。

まあ嶺についても、主に年上の女性職員の間で噂が広まっていきつつあるのが、嶺の目下の悩みだろう。本人にとっては、あのミスコンこそが最大の黒歴史だろうから。

（はあ、嶺も大変だ）

そう心の中で嶺にさり気なく労う駿介。

だが、彼もまた嶺まではいかずとも、中世的な顔立ちで女性局員達のみならず、学園や様々な関係各所の女性を虜にしている事実があったりする。

結局は誰もが、知らぬは本人ばかりということか。

「それで、中将。そのロストロギアというのは」

助平に直接中てられて困ったように顔を真っ赤にしている嶺を横目に、駿介は助け舟を出す意味も含めて、ダムド中将へ問う。

「うむ。古代遺失物管理課が発見したロストロギアでな。データベースに載っていなかったなので、封印処理を施してから移送されたのだ。近い内に、専門の研究チームが派遣されることになっている」

「ならば、何故自分を？」

駿介は、ダムドの狙いを計りかねていた。

いかに未知のロストロギアといえど、専門家が検分に来るといふのなら素人の自分達を呼ぶ理由、必要性が解らない。

新たな種のロストロギアを見つけたことを自慢するか。否、地上本部が本局に喧嘩を売るならまだしもここは本局。相手もいなければ、そうするメリットもない。

ならば、何か。

答を待つ駿介に、ダムドは意味深げな笑みを浮かべて答える。

「何、大したことではないさ。だが、君達ライダーならば気付くのではないかと思ってね」

「気付く？」

「……………ここだ」

唐突に足を止め、ダムドは向き直った。

その先にあつたのは、扉。

魔法術式の施された頑丈な扉だが、ダムドは慣れた手つきでパスワードを入力していく。

やがて、ピー、という小気味いい音が辺りに響き、扉が開いた。

「まあ、見てみたまえ。きつと、見覚えがあるはずだ……………」

そう言って、ダムドは部屋の照明をつける。

すると、そこにあつたものとは。

「こ、これはっ……………!!?」

「ベルト……………!!?」

何もない部屋の中央に、まるで数億円もするダイヤの如く置かれたショーケース。

その中には、メカニカルな外装を晒し、照明をキラキラと反射する、神々しくも雄々しい一本のベルトだった。

「ほう、やはり見覚えがあるようだな」

「……………仮面ライダーのベルトに酷似しています。中将、これをどこで?」

「反応を受けて調査に行った私の部隊の者が偶然発見したらしい。いや、実にいい拾い物をした」

この男のことだから、偶然などではなく、これがあるという確たる思いを以って捜索したのだろう。

だが、今はそんなことは問題ではない。

ここに、仮面ライダーとしての力がある。それが問題なのだ。

「中将、これをどうするおつもりで?」

「別に。どうもいやしないさ。ただ、少し研究はさせてもらうがね」

「研究？」

「そう。このベルトの中はどうなっているのか。そのメカニズムの一端を、少し見せていただこうと思ってるね」

やはりか。

そう思って、駿介は人知れず手を握る力を強める。

他の部隊にだけは、仮面ライダーの力は渡すわけにはいかない。

その思いで部隊を運用してきた駿介に、この展開はあまりにも無慈悲すぎた。

だが、今更状況を嘆いても仕方がない。

今、ここにベルトがある。その事実を変えようもないのだ。

「それで中将。改めて、自分に用とは何でしょう？」

「おや、これはまた唐突だね」

「まさか、このベルトを自慢するためだけに、自分をここへ呼んだわけではないのでしょうか？」

駿介の言い様に、ダムドはほう、と声を漏らしながら顎を擦ると、一息吐いて、答えた。

「そうだな。では、単刀直入に言おう。このベルトの研究に協力しろ、小野寺少将」

中将の言葉に、駿介は瞠目する。
まさかこうもストリートに協力を求められようとは、予測していなかったからである。

だが。

「お断りします。契約では、ライダーアーツの局員普及に対する協力だけだったはず。技術提供は、それに含まれてはいないはずです」
ライダーアーツの普及に関しては、部隊の上層が教導という形で部隊へ出向くことでなかなかの成果をあげている。

契約の条件には滞りなく対応している以上、この要求を呑むメリックは駿介には存在しない。
むしろ、悪化するとすら言えるだろう。

「それと、もし代わりに権力や財力を、と考えていらっしやるのなら、無駄ですよ？ 自分はどんなことがあるうとも、貴方方上層部にライダーアーツの技術を提供する気はない」

「フフフフツ………ハハハハハッ！ いや、これは参ったな」

突然笑い出し、頭など掻くダムド中将。

これで漸く諦めてくれたか。

そう思い、目を閉じてほっと息を吐いた駿介と嶺だったが。

「？ 緊急回線？」

「何だろ？」

突然開かれたモニターに、駿介と嶺は揃って首を傾げる。

だが緊急とある以上でないわけにもいかないの、とりあえず駿介は通信をオンにした。

すると。

『駿介君っ！』

「のわっ!?!」

「わあっ!」

「おやおや」

突然画面に超アップで映し出された少女の顔に、三者三様の反応を見せる。

『駿介君、大変、大変なの!』

「待て待て、落ち着けなのは。またフェイトと凧が何かやらしたか？」

最後に部隊隊舎へと送ってやったのは自分なので、嶺を巡る争いの末に訓練場が半壊でもしたのかと、駿介は目算を立てて問う。

だが、続く、少女高町なのはの切迫した声音に、駿介の表情が変わった。

『そんなんじゃないよ！ ああつ、このままじゃ龍也君がつ………
…！』

「何だ、一体何があった!？」

『とにかく！ 早く来てっ！ お願い!!』

そう言い残したのを最後に、通信は途絶えた。

「おい、なのは！ おい!!………畜生っ！ 行くぞ嶺!!」

「うん！」

いそいそと踵を返そうとする2人。

だがそれを、

「小野寺少将」

ダムド中将が、呼び止めた。

「……………ダムド〓バツカー中将。はっきり申し上げて、自分はライダーツールの技術を提供しない意思は変わりません。ですが、それでも尚話し合いの場を持ちたいと仰るのであれば、後に、然るべき場で。いつでもお受けいたします故。それでは」

振り返って敬礼すると、駿介は飛び出すように外へ駆け出していく、嶺もまたその後に従う。

部屋には、輝く光沢を放つライダーベルトと、ダムド中将のみが残された。

「……………フン、人形の小僧如きが、いきがりおつて。まあいい」

ダムドは駿介の去り、開け放たれたドアから視線を外し、ゆっくりとベルトの前へ歩み寄る。

そして、それを愛おしげに見つめ。

「人形は人形同士、踊り狂っておればよいのだ」

ダムドの眼前、輝くばかりのベルトの光沢が、その時だけは、怪しげに変わった。

アウターヘブンナイツ。

大層な名を付けられたそれは、近年新規に創設された、管理局の精鋭部隊である。

その業務内容は主に、ショッカーの怪人達による進攻の阻止、及び、仮面ライダーが使う特有の戦闘術
ライダーアーツの研究だ。

業務内容が示すとおり、その構成員は全て仮面ライダーであり、それぞれN.O.で階級付けされている。

神崎 嶺はこのN.O.3であり、日向 凧はN.O.8、駿介はN.O.1、則ち隊長であった。

そう、こここそが、駿介が部隊長を勤める部隊である。

そのアウトターヘブンナイツの隊舎では、現在珍事が起きていた。

「どうしてこうなった……………」

ただっ広い訓練場の端で、青年が唐突にそう呟きを漏らす。

否、正確に言えば唐突に、ではない。

確かに、言葉そのものは会話の脈絡もへったくれも全て無視した唐突なものだが、問題なのはその回数にあった。

もう先程の一回以前にもう既に数回、彼はその言葉を繰り返したばかりなのだ。

「巧、さっきからそればっか」

そう言って、巧と呼ばれた少年の隣で苦笑しているのは、海春 ミライ。

2人共、アウトターヘブンナイツの主要隊員である。

その2人は今、目の前で繰り返されている熾烈な攻防を、頭痛を感じながらじっと見つめている。

「やあああつ！」

「英魂招来！ エクスプロードツ！！」

斬撃や爆風が飛び交い、訓練場に次々とクレーターを作っていく。その惨状たるや、この訓練場を設計した人物が見たら、目を回して卒倒することだろう。

幸いにもその本人が来ることは万に一つもないが、駿介のデスクの書類の山に新たな始末書が加わるであろうことだけは、目に見えていた。

「いいよね、別に。私達の責任じゃないし。ここに転移させてきた、駿介の責任なんだから」

「いやミライ、むしろここじゃなかったらもつとヤバイだろ。別の場所だったら大目玉だぜ、これ」

「まあ、それはそうなんだけど」

他の訓練場がこのように穴ぼこだらけになれば、怒られるのはそれをやった2人だけでは済まないのは間違いない。たとえば部隊員たったの1人が起こしたことで、部隊全体の責任へと繋がってしまう。

ミライとしても始末書の量は どうせ書くならば少ない方がいいので、巧の言葉には頷かざるを得ない。

あくまでもこの2人、日向 凧とフェイト「T」ハラウオンの戦いを止める、という選択肢は、彼らの中には存在しないらしい。

止めようとしたらしたで、こちらが酷い目に遭うことが目に見えて
いるからである。

恋は盲目。それだけ言えば、止めようとした人間がどんな目に遭う
のか。少しでもご理解願えるのではないかと思う。

因みに犠牲者はここにいる2人と嶺、それと今この場にはいないが、
No.4もまた巻き添えをくらっている。

しかし、それでもここから逃げることをしないのは、

「終わるまで待つしかないかあ。ね、審判」

「うっさい……………」

審判を（勢いに圧され、半ば強引に）任された責任故。

今すぐに逃げたいのはやまやまだが、強引とはいえ引き受けてしま
ったのは自分なので、どうすることも出来ないのだった。

と、そんな混沌とした訓練場へ、新たな人影が姿を現した。

「うわー、また凄いことになってんな……………」

「にはは……………フェイトちゃん、凄い迫力……………」

「あ、龍也」

「なのはちゃんも」

現れたのは、先程話題に上ったアウターヘブンナイツのNo.4、龍也。そしてその恋人たる高町なのはの2人だ。

「まーた嶺の奴取り合ってるのか、あいつら？」

「そうなんだよ。たく……………」

「嶺君、モテモテだねー」

「本人にはそのつもりはないみたいだけどね……………」

そんなことを口々に話しながら、4人で模擬戦を見学していた。

その間にも、2人の模擬戦という名の戦争は激しさを増していく。

『I・X A・k n u・c k・l e・R・I・S E・U・P』

「ライダーキック！」

『R I D E R K I C K!』

ライダーとしての必殺技を発動させる両者。

フェイトの仮面ライダー、イクサの持つ赤い刃の長剣、イクサカリバーに太陽のごとき煌めき、凧の変身するカブトの右足にエネルギー、タキオン粒子が滾る。

両者がそれを、いよいよ振り抜こうとしたところで。

「え!？」

「何だ!？」

フェイトと凧との間で、唐突に凄まじい光が沸き起こる。

それはうねり、徐々に輝きを増していき。

「きゃああああああああつ!？」

爆心地に最も近いところにいた2人を吹き飛ばした。

「フェイト、凧っ!」

「フェイトちゃん!」

爆風に耐えながら、龍也となのはが辛うじて爆心地を見つめながら
そう叫ぶ。

そしてややあつて爆風が止み、まずは傷だらけで倒れ伏しているもの、身じろぎしている2人の無事に安堵する。

そして、次に目がいったのは。

「……………何だ、お前は……………!？」

彼らの目の前に現れたのは、全く見たこともない生物だった。

対表面は重厚な殻に覆われ、目は緑色に染まる複眼。

頭には、長く象徴的な触角が2つ、揺れている。

一見すると、嘗て世界の破壊者と呼ばれた男が遭遇した邪悪な金属生命体、ドラスによく似ているが、？それ？が放つ力の波動はドラスとは比べ物にならない。

自然と、その場の全員が身構えた。

なのは、ミライは傷ついたフェイトと凧を回収すべく。

巧と龍也は、それぞれ戦闘ツールを手に取る。

「……………なのは。フェイトを連れて逃げる」

「ミライも。凧を頼む」

頷き、ドラスもどきの隙をついてなのはとミライが2人を救出し、離れていくのを確認する。

ただならぬ雰囲気彼女らなりに感じ取ったのか、拒否の意思を示すことはなかった。

なのはだけは、未だに上空でおろしているが。

「よし。……………行かせ、巧」

「いつでもいいぞ」

言い交わすと、同時に2人は変身ツールを手に取った。

『5・5・5 STANDING BY』

龍也が手に取った長方形の黒いカードケースのようなもの

龍騎のカードデッキを前に突き出すと、変身ベルトVバックルが彼の腰に反転しながらやがて重なり、巧が携帯電話型ツール、フェイスフォンの5を3回、ENTERを1回押すことで、待機音声が鳴り響く。

「変身!」

『COMPLETE』

カードデッキをVバックルの横の挿入口から、フェイスフォンをバックルのコネクターに接続し横に倒すことで、ベルトのバックルが完成し、変身が始まる。

片や、ライダーの像が鏡のように反転しながら重なり、片や、赤いラインが体を這うようにして展開、発光と同時にボディースーツを展開した。

龍也が変身するは、赤いボディースーツに中世西洋騎士の如き鉄仮面を纏ったライダー、龍騎。

巧が纏うのは、大きな黄色い複眼と牙のように鋭いシャープなクラッシュヤー、そして身体を這う赤いラインが特徴的なライダー、フェイス。

複眼が発光し、変身の完了を告げると共に、2人は駆けた。

「はあああああつ!」

ドラスもどきの鳩尾目掛け、フェイスがキックを放つ。

しかしドラスもどきはそれをあっさりと手で受け止め、そのままフ
アイズを大きく投げ飛ばす。

「うおお！？」

下級の怪人^{オルフェノク}であれば一撃で灰燼と化す蹴りをあっさりと返され、投
げ飛ばされた衝撃に驚きの声を上げつつも、空中で身を翻し、フア
イズは悠々と着地した。

それを見、続いて龍騎が動いた。

バックルのカードデッキからカードを抜き取った龍騎が、左前腕に
装着された、龍の頭を模したカードリーダー、ドラグバイザーへと
挿入した。

『SWORD VENT』

天空より現れる、炎のような紅の色をした龍。

蛇のように、しかし流れるように威厳を放ちながらうねり現れたそ
の龍の名は、無双龍ドラグレッダー。

龍騎の契約モンスターにして、戦う力の源とも呼べる存在だ。

そのドラグレッダーから1振りのサーベル状の剣が落とされ、龍騎
は華麗にそれを掴むと、ドラスもどきへ向けて突撃した。

ドラグセイバー。カード？ソードベント？の効力により齎される、
ドラグレッダーの尾を模した片刃剣を大上段に構え、一気に振り下
ろす。

「はあっ！」

だがその一閃も、ドラスもどきの腕でガードされる。

重厚な鎧のような表皮が刃の侵攻を易々と堰き止め、弾き返す。

そして、がら空きになった龍騎の胸を、ドラスもどきは鍵爪が生えた腕で幾重にも渡ってきりつけた！

「ぐああああっ!?!」

装甲から火花が飛び散り、大きく仰け反る龍騎。

たたらを踏んでなんとかダウンは避けたが、予想以上に大きなダメージに膝をつく。

「くそっ……………」

続いて入れ替わるようにして、ファイズが駆けた。

走りながらベルトに備え付けられたツール、ファイズショットへミッションメモリーを挿入。ファイズフォンのエンターキーを押す。

『READY』

『EXCEED CHARGE』

ナツクルの形に展開されたファイズショットをはめた手に、エクシードチャージされたエネルギー、フォトンブラッドがベルトから流入する。

ファイズの必殺技の1つ、グランインパクト。

小手先の技が効かないのであれば、必殺技で。

そう考えた巧の思考は、あながち的外れというわけではない。

だが、ここでそれを実行するにはあまりにも不用意で、愚策。

事実ドラスもどきの詳細はまだ何1つ解ってはおらず、それが果たして有効打となりえるのかも解らないのだ。

そして隙を作らない上で、最も隙の大きい必殺技を放つことは

愚策以外の何物でもなかった。

「……………フンッ！」

人間で言うところの掛け声のような声を上げて、ドラスもどきはファイズの拳を受け止める。

無論、まともに拳自体を受けたわけではない。

自身の拳をファイズの腕に当てることで拳の軌道をずらし、その上で腕そのものを絡めとることで、技を完璧に封じたのである。

「なっ!?!」

驚き、ファイズはなんとか逃れようとするが、既に遅い。

ドラスもどきの空いている方の手に、光弾が出現し

。

「があああああああああっ!?!」

ファイズは直撃し、吹き飛ばされた。
衝撃でベルトも外れ、変身が解除される。

落下した先で、巧は気絶していた。

「巧っ！？ 畜生おおおおおっ！」

吹き飛んだ巧に悲鳴に近い声をあげ、憤る龍也。

咆哮を上げた勢いのまま、デッキからカードを引き抜く。

燃えるような炎を宿した

黄金の片翼の描かれたカードを。

同時に、ドラグバイザーが変身し、龍の頭を模った武具へと変形した。

ドラグバイザーツヴァイへと変形した口を開け、龍の口へカードを挿入する。

『SURVIVE』

エコーがかった音声が響き、龍騎をより雄々しき紅の騎士へと変身させる。

仮面ライダー龍騎、サバイブ。

原典龍騎における最強フォームであり、龍也の切り札の1つである。

『SHOOT VENT』

ギヤアア、と空気を引き裂く声が轟き、龍騎の契約モンスター、ドラグレッダーがサバイブにより進化した姿、ドラグランザーが現れ、龍騎サバイブがドラグバイザーツヴァイの先端を向けると同時に、同じ方向へ向けて顎を開く。

「くらえええっ！」

引き金を引くと同時に、ドラグランザーの口腔から発射される複数の火炎弾。

並のモンスターなら一撃で葬り去る程の威力を持つ一撃だ。

ドラスもどきも、これはさすがに無傷ではいられないと悟ったか、腕を交差させて防御の構えをとる。

やがて火炎弾が着弾し、ドラスもどきを爆炎で包み込んだ。

「やったか……………？」

期待の籠った眼差しで、龍騎サバイブは煙の向こうを見やる。

が。

「な……………に……………？」

ドラスもどきは、健在だった。

細かい焦げ目や傷こそあれ、今だ五体満足で、光を失わない眼光は、見るものに恐怖を与えるに充分だった。

「ウウ……………アアアアアアアアアアアア！」

咆哮を上げ、頭上に巨大な光弾を出現させるドラスもどき。

それを呆気に取られた様子で、龍騎は見つめたまま動けない。カードを使う余裕もないほどに。

「龍也君、逃げてっ！」

なのはの悲鳴にも近い声を聞き、漸く龍騎サバイブは我に返るが既に遅い。

ドラスもどきの光弾が、真っ直ぐに龍騎サバイブへ迫り

「があああああああああつ!?!」

直撃した龍騎サバイブもまた、ファイズと同様変身が解ける。

後に残されたのは 傷だらけで倒れふす巧と龍也の2人、そして傷はあるものの未だダメージを負った様子のないドラスもどきのみ。

「龍也君っ!」

倒れ伏し動けない龍也に、ドラスもどきがゆっくりと近づいていく。

思わず自分のカードデッキを取り出そうとしたなのはの手を、凧を抱えたミライが止める。

なのはは彼女を睨むが、瞬間、はっとして押し黙った。

自分の手を握るミライの手が　　恐ろしく震えていたから。
自分を見る彼女の表情が、酷く悲しみに染まっていたから。

だから。手を下げて、悔しげに唇を噛締めるしか出来なかった。

ドラスもどきが咆哮する。

その獯猛な腕が、龍也へ振り下ろされようとして

。

「……………おい。何をしている、お前」

心の底から冷え渡るドスの利いた声が、辺りに響いた。

「駿介、君……………」

なのはは、恐怖に中てられた表情のまま、呆然と、ドラスもどきの

腕を受け止めた彼らの隊長の名を呼ぶ。

小野寺 駿介。

本局へ出張に行っていた彼が転移の魔法陣から現れ、ドラスもどきの腕を受け止めていた。

「もう1度訊くぞ。……お前、何してる」

殺気の籠った眼光が、ドラスもどきを射抜く。

だがそれも彼(?)にはどこ吹く風で、光弾を発生させ射出する。

駿介はドラスもどきを解放し、

「神具！ エクスカリバー！」

剣を一閃。金色の砲撃で、光弾を相殺した。

「ミライ、なのは！ 龍也と巧を連れて行け！」

「で、でも、駿介君が……………」

「やれ」

有無を言わせぬ殺気を孕んだ声音に、なのはの肩が震える。

「なのは」

肩に手を触れられることにすら身を震わせるなのはに、肩を叩いた

本人、ミライは努めて優しい口調で諭す。

「今の私達が向かってても、足手まといになるだけ。ここは、駿介に任せよう?」

「でもでも、何か出来ることが……………」

「何もない」

はつきりとした否定に、再びなのはの肩が跳ねる。

残酷だと解っている。

だが、これは真実。伝えなければ、彼女は間違いなく、凄まじい力の応酬に巻き込まれ、

最悪　その命を落とすこととなるだろうから。

「何もないの。私だって、ただ見ているしか出来ないんだもの。行ったら、間違いなく足を引っ張ってしまう。そんなの嫌でしょう?」

ミライの言葉に、ついなのはは言葉を失ってしまう。

確かに、彼女の言っていることは正論だ。それは理解できる。でもだからといって、それを納得していい理由にはならない。

だが。

「……………うん」

意に反し、なのはは頷いた。

無論、納得したわけではない。

だが、彼女は気付いてしまったのだ。

戦う力を持つが故に、己が無力を悟ってしまった。

なのはは龍也を、ミライは巧をそれぞれ魔法陣に乗せ、その場を後にしていく。

「……………さあ。これで邪魔者はいなくなったな」

去っていくのはとミライを見送り、駿介は言う。

意外にも律儀なのか、それとも追う必要もないと考えたか、ドラスもどきはじつと駿介を見つめて動こうとはしていなかった。

「久しぶりだな。お前は俺を覚えてないかもしれないが、俺は片時も……………お前のことを忘れたことはなかった」

地の底を這うような、低音。

駿介自身、声変わりをしたばかりの身体でそれほどの低い声が出るわけではない。

彼の高音をそうせしめているのは、彼の放つ尋常ではない殺気と、底知れぬ覇気に他ならない。

駿介の身体が、黒い霧に浸食されていく。

やがてそれは形を変え　　駿介を、異形の姿に変身させた。

仮面ライダークウガ、アルティメットフォーム。

究極の闇とまで呼ばれた、仮面ライダークウガの究極の姿。

本来コントロールされている力は複眼を赤く染めるのだが、今の駿介のそれは、黒。

怒りに飲まれ、激情のままに闇を解放しているのだ。

「お前……………俺の家族を手にかけておいて……………今度は仲間を奪うつもりかあああああああああああああつ!!」

怒りのままに咆哮し

黒き戦士は駆けた。

Chapter 2 Side: DECADE

「せいつ、やつ、だあっ!」

街中に響く、声と打撃音。

申し訳程度の遊具が置かれ、砂場や滑り台、ベンチに噴水といったものが自然な間取りで設置されたそこは、何の変哲もない公園だった。

唯一、ここで今起っていることを除けば。

『ATTACK RIDE……SLASH!』

機械音声が鳴り響くと共に、白銀に輝く刀身がマゼンタの輝きを帯びて、幾重にも分身しながら異形の身体を捉える。

スパークを上げてのけ反る異形に、マゼンタの影は追撃をかけた。

『ATTACK RIDE……GIGANT!』

その手に現れたのは、両手にも余る大きな4連装ミサイル砲。

マゼンタの戦士はそれを、未だ斬撃のダメージに浮足立つ異形へと

「はあっ!」

解き放った。

ミサイルを受けた異形はその巨大なる衝撃に成す術もなく、その爆炎とともに消え去った。

そしてまた、別のところでも。

「おりゃあああああつ！」

赤い戦士の燃えたぎる跳び蹴りが異形を吹き飛ばし、

「ウェイクアップ？」

「はあああああつ！」

紫の光の翼を背に宿した白き戦士が、その剣で切り裂いていた。

マゼンタの戦士が相対していた異形と同様、断末魔の叫びを上げて爆散していく異形達。

それを確認すると、3人の戦士は駆け寄り集まった。

その身体が光に包まれ、人 否、『ニンゲン』の形を模る。

「士。夏海ちゃん。お疲れ」

「ユウスケも。お疲れ様でした」

「当然の結果だ」

ユウスケと呼ばれた、人懐こい笑みを浮かべた黒髪の青年に、夏海という黒いロングの髪をした女性と、士と呼ばれたふてぶてしい面

構えに茶に染まった短髪という俺様気質な外見をした青年という2人が、全く対照的な答を返す。

士の回答は人によれば腹が立つ答だろうが、いつものことなのだろう。ユウスケも夏海も苦笑するだけで、別段咎めたりはせず、しきりに辺りを見回し始めた。

「もう……………いませんね」

「びつくりしたよなあ……。いきなりグロンギヤアンノウンが現れるんだから」

ユウスケの言うグロンギヤアンノウン。これこそ、先程彼らが相手にしていた異形の呼称である。

それぞれが『仮面ライダーークウガ』の世界、『仮面ライダーアギト』の世界に属する怪人であるが。

「何でこんなところに……………怪人がいるんだ？」

「知るか。だが1つだけ、はっきりしたことがある」

「何ですか？」

夏海が問うと、士は徐に首に提げたトイカメラとは別のカメラをユウスケへ向け、シャッターを切る。

「ちよつ、士君！？ 何うちのカメラ平然と持ち出してるんですか
！！」

「どうせ使われずに放置されてたんだ。俺様に使われれば、このカメラも本望だろうよ」

夏海の家は写真館だ。そのため写真とするのに現像という手順が必要なカメラは使われることが多いが、そうになると土の持っているようにその場でプリントアウトしてくれるようなカメラは自然とお蔵入りになる。

おそらく棚で埃でも被っていたものを拝借してきたのだろうことは明白であるため、正論に、夏海もそれ以上のことは言えなかった。

そうして、写されるがままに写ったユウスケの写真にはユウスケは、写ってはいなかった。

「おい、土。俺が写ってないぞ！」

「ちょっと貸して下さい。………あー。土君、ついにまともに被写体も写せなくなってしまうたんですね………」

「さりとて失礼なことを言うな。そうじゃない。俺は確かにユウスケを写した。だが、写真には、何故かユウスケの姿が映し出されない」

「「え？」」

2人ほぼ同時に声を上げて顔を見合わせると、半信半疑なユウスケが夏海を被写体にシャッターを押す。

しかし、やはり出てきた写真には。

「本当だ、何も写ってない」

「い、一体どうなってるんでしょう？」

「……………まただ」

不可解な現象に？マークを浮かべる夏海とユウスケに、土は呟く。

「また、つて？」

「今まで旅してきた世界と同じだ。この世界が俺達を拒絶してる。だから写真を撮っても……………こつなる」

こつ、と誰もいない公園を写した写真を見せる土に、夏海は「でも、」と口を挟んだ。

「私達も撮れないのはどうしてですか？ それに、今までは紛いなりにも写すことは出来てたんですよ？ 全く写らないなんて、変です」

「だよなあ。目茶苦茶に歪んでたけど、写るものはちゃんと写ってたし」

疑問点を挙げていく夏海と、それに賛同するユウスケ。

「さあな。とりあえず歩いてみるか」

そう言って先に歩いていってしまう土に、首を傾げながらも夏海とユウスケは後を追った。

「わあ、人がいっぱいだ」

人が奔めく大通りまでやってきた一行。

そのあまりの人の多さに、ユウスケが感嘆の声を漏らす。

「なんだか平和ですね。怪人がいたなんて嘘みたい」

「人も世界も、外っ面だけじゃ中身までは解らない、ってな。怪人がいようがいまいが、平和に回りつつける世界もあるってことか」

「ライダーもいないのに……………なんか凄いな、士！」

ユウスケは単純に喜んでいるが、士は訝しむばかり。

(どういうことだ……………？ まるで、俺達を拒絶するようなこ

の感覚……………)

拒絶、といっても、今までの世界のような生易しいものではない。もっと大きく、はっきりとした拒絶。ここに立ち入るなという、明確な意思表示。

「わーっ、旨そー!」

まるで子供のように、八百屋に並ぶ林檎を見つめるユウスケ。

「林檎ですか、いいですね。写真館で留守番してるおじいちゃんへのお土産にしましょう」

夏海も一緒になって、2人がかりでの林檎の選定が始まった。

それを呆れたように見つめる土だったが、不意に何かを思い立ったらしく、一歩、また一歩と歩み寄る。

「試してみるか……………」

言っが早いか、すっ、と彼の手が手近な林檎へと伸び

シャリ。

「うん、美味しい」

「へっ!?!」

「ちよ、土君!? 何やってるんですか、売り物に!」

慌てて夏海とユウスケが止めるが、既に林檎には齧った痕がついて

しまっている。

「すみません、弁償しますから……………」

慌てて土から林檎を取り上げ、店員らしき気の良さそうな青年に頭を下げる。

しかし 返事がない。

「え、あれ？」

「あー、もしもーし？」

ユウスケが彼の顔の前で手を翳すが、青年はそれにも反応する気配が見えない。

「くださいな」

そう、気付けば土達の隣に中年の女性が立っていて、その声をかけると、青年はそれには機敏な反応を見せる。

いらっしやいませ、何をお求めでしょうか？ と、接客をする彼には不自然さはどこにも見当たらない。

不自然なのは、むしろ。

「もしかして、さつき土君の言ったことって……………」

「ああ、たぶんそういうことだ」

「俺達の存在が……そもそもこの世界に受け入れられていない？」

だから人は、誰も彼らの姿に気付くことはない。

だから、店先の林檎を勝手に食べても咎めるものもない。 いな

「一体………どういう世界なんでしょうか、ここ………!？」

何だか途轍もなくこの世界が不気味に思えてきた夏海は、しきりに辺りを見回す。

どんなことを どれほどのことをしても、誰も自分の存在に気付かない。そんな世界へ放り込まれたのだから、その反応は当然とも言えるだろう。

「解らん。とりあえず、一度写真館へ戻るぞ」

「そうだな。ここにいても、人と話せないんじゃないだろうもないし」

情報を集められないのであれば、写真館で次の世界へ移るのを待つしかない。

そう考えた一行は踵を返し、一路、彼らの拠点である光写真館を目指した。

世界の破壊者、ディケイド。

旅する世界に拒絶され、その瞳は何を見る

。

仮面ライダーディケイド After the Movie
Warrior
The Memory of

仮面ライダー、ディケイド。

それは、青年、門矢 士のもう一つの顔。

その実態は世界の破壊者とも、悪魔とも罵られた。

世界を旅し、世界を繋ぐ存在。

そのため、数多の世界は融合し、やがて
られていた。

滅びる。そう語

しかし、その本質は似て非なるものだった。

仮面ライダーディケイドの役目は、数多ある世界に存在する仮面ライダー達を破壊し、人々の記憶にその物語を焼き付けることで、それぞれのライダー世界を、忘却という名の滅亡から救うこと。

それこそが、仮面ライダーディケイド。？世界の破壊者？たる、門
矢 士の役割だった。

ライダーの破壊とともに、ディケイドもその物語とともに存在する
運命だった。

だが、今彼はここにいる。

物語という名の世界はなくとも、旅が彼の物語であり、世界なのだ
から。

そんな仮面ライダーこと門矢 士は現在、嘗て巡ったライダーの世
界の裏側の世界、ポジの世界を巡っている最中だ。

既にポジ・カブトの世界、ポジ・Wの世界、そしてポジ・キバの世
界を回り終え、残るは7つ。

まだ先は長いが、世界の旅人として 悪しきライダーを破
壊する存在として、様々な世界を巡っている。

そんな最中、降り立ったのがこの世界なのである。

「ただいまー」

気のない挨拶を発し、夏海が中に入ると、彼の祖父である栄次郎が出迎えた。

「やあやあ、皆お帰り。昼食の準備が出来てるよー」

「よっしゃ！ 俺、腹ぺこぺこだよ、栄次郎さ〜ん！」

ユウスケのリアクションが嬉しかったのか、満足げに笑って栄次郎は奥へ消えていく。

士達が中へ上がると、そこに待っていたのは。

「やあ、士」

「おっ、皆お帰りー」

青年と少女が2人、テーブルでコーヒーを楽しんでいた。

1人は、ポジ・Wの世界から何故か居ついてしまった光家の新たな居候。もとい、旅の仲間である少女、色彩香。

もう1人は、士とは共闘もするが基本は腐れ縁で、激突することも度々ありえる、世界を股にかけるトレジャーハンター、海東 大樹。

「……………お前、何平然と席に座ってやがる」

「何って、コーヒー。士もどうだい？」

「土。このコーヒー、大樹が入れてくれたんだよ！」

「いらん」

一蹴し、あからさまに海東から離れた席にどっかと座る土に、つれないねえ、と海東がわざとらしく肩を竦める。

このようなり取りもいつものことなので、夏海とユウスケも余った席につく。

「1つ忠告しておくよ。この世界、あまり出歩かない方が賢明だと思うよ」

「それ、どういふことですか？」

「この世界が俺達を拒絶しているのと、何か関係があるのか？」

海東の突然の忠告に、夏海とユウスケは飛びついた。

土も彼の方は向かないが、聞き耳は立てている辺り、興味が無いわけでもないらしい。

「この世界は、君達の言うとおり普通じゃない。この世界は他の世界から来た存在をまるで受け付けない。監視者も、ライダーも……」

…怪人も」

「なるほど。だから、怪人がいても人は騒ぎもしないしそれに対抗する気配もない。そういうことか。だがいいのか？ そんなに俺達にペらペらと喋って」

「別に。僕も、こんな世界にいる時に、あまり波風は立てたくないからね。それじゃあ僕はそろそろ行くけど、あまり余計なことはいないでくれたまえよ」

そう言っ指鉄砲の仕草を見ると、海東はいつも波風を立てる渦中
にいる人物らしからぬ発言に驚く一同を尻目に、写真館を出て行こ
うと戸口へ向かう。

「待って下さい！ あの、この世界は一体何の世界なんですか？」

おそらくは誰もが持っていたであろう疑問を、夏海は海東を呼び止
めて訊ねた。

士でも解りかねないことを知っていたのだ。

おそらくは他にも様々なことを知っているであろう彼から、可能な
限り多くの情報を引き出したいという彼女の考えは間違っではないな
い。

それを訊き、海東は珍しく沈んだ表情を浮かべるが、それも一瞬で
霧散して、一言言い放った。

「ここは……………メモリーの世界さ」

「メモ、リー……………？」

「メモリー。つまり、記憶の世界」

「記憶……………」

ユウスケが繰り返す言葉に海東は頷く。

それで、士には全て合点がいった。

そして、海東が忠告する意味も、なんとなくは。

「この世界は、記憶から出来た幻想の世界。とある少年の記憶から出来た地獄だ」

「記憶の世界、か……………」

海東 大樹が写真館から出て行ってしばらく経った午後。

彼の表情が気になった3人は、再び町に出ていた。

普段は過ぎるといっほほど大きく出る彼が、珍しく消極的な訳が気になる、というのは土の談だ。

「でも大樹さん、どうしちゃったんでしょう？」

「さあな。漸く、己の器の小ささに気付いたんじゃないか？」

「「ない、ない」「

口を揃える夏海とユウスケだが、土自身冗談のつもりだったのか、さして気にした様子もなく町の様子を伺う。

見れば見るほど、何の変哲もない、平和な町並み。

ここがどうして、彼の言う？地獄？になりうるのだろうか。

「ここが、どうして地獄なんでしょう……………」？

すぐ後ろを歩く夏海も同じことを思ったのか、そう口にする。

賑わう商店街を見ていると、確かにここが地獄になるなどと想像も出来ない。

「きつと、性質の悪い冗談か何かだったんだろ。あのこそ泥め……………」

「なっ!?!」

怪人

グロンギに襲われ、倒れ伏す住民達だった。

家では、クリスマスパーティーの真っ最中だったのだらう。

クリスマスの飾り付けが無惨にも引きちぎれて床に散乱し、倒れている住民とともに無残な姿を晒している。

(この家、どこかで……………?)

「まだ息があります!」

家の外観にどことなく覚えがあり、思考に埋没しようとしていたユウスケの意識を、夏海の叫びがかき消す。どうやら、住民はまだ生きていたようだ。

尤も怪我は酷いし、血もそれなりに流れてはいるが、致命傷にはあたらぬ。

それに安堵し、土はディケイドへ変身する白いカメラ形のツール、ディケイドライバーを取り出して、それをバツクルとしてベルトを形成。ユウスケは仮面ライダークウガへ変身するために必要であり、普段は体内に眠っている古代のベルト、アークルを呼び出す。

「いくぞ、ユウスケ!」

「ああ!」

「変身!」

『KAMEN RIDE………DECADE!』

ディケイドライバーのサイドハンドルを引くことで中央のカードリーダー部が90°回転、露出したカード挿入口に？カメンライドディケイド？のカードを挿入し、再びサイドハンドルを閉じることで、音声で鳴り響く。

士の周囲に出現するのは、鉛色の幾つもの？仮面ライダー？のシルエツトで、それが土という1点に集約することで、漆黒のライダースーツを形成する。

さらに、頭上に出現した紅のライドプレートが頭部に突き刺さり、融合してバーコード状の構造物を模る。同時に、黒い部分がマゼンタに塗り替えられ、最後に緑の蛍光色をした複眼が発光し、仮面ライダーディケイドの変身が完了した。

仮面ライダーディケイド、聖人態。

ライダー大戦という地獄を乗り越え、全てのライダーの物語を守ることに成功した、救済の破壊者たる彼に相応しい姿だ。

一方のユウスケもまた、変身した。

大きく右前方に振りかざした右手を、アークルの左越しのプッシュスイッチに添えた左手へと当て、一息に押す。

そして両手を、まるで全てを迎え入れるように広げると、力の高まりを表すかの如くアークルから音が鳴り響き、やがて

面ライダークウガの装甲が、ユウスケの全身を覆い尽くした。

黒いボディースーツに、燃えるような赤の胸甲。

同様に赤く染まった複眼の上には、冠のように雄々しい黄金の3本ツノが光っている。

仮面ライダークウガ、マイティフォーム。
クウガの最もスタンダードな形態であり、様々な戦局に対応できる
姿である。

「はっ！」

変身が完了すると、ディケイドとクウガは同時に駆けた。

そうして、今正に住民へと襲いかかるうとしているグロンギをその
場から引き剥がそうと、手を伸ばすが。

すうっ……………。

「何っ！？」

まるで幽霊か何かのように、ディケイドとクウガはグロンギに触れ
ることすら叶わなかった。

「まさか、こいつらはこの記憶の世界特有の存在だったってのか！
？」

驚愕するディケイドの横で、クウガの動きが止まる。

全ての納得がいったというように、その場に立ち尽くすクウガ。

「……………そうか。やっぱり、そういうことか」

「……………ユウスケ？」

呆然とうわ言のように呟くクウガに、訝しげに夏海が声をかけるが、クウガは反応を示すことなく、視線を階段へと移す。

「もし俺の思っているとおりだしたら、ここで

皆まで言う必要も無かった。

クウガの視線の先にいたのは、少年。

端整で中性的な顔立ちの、13歳程の少年が、階段からこちらを睨んでいた。

「お前達

俺の家族に何やってるんだあああああああ

あああ！」

激昂し、少年が異形へと飛び掛った。

Chapter 3 Begin · s night of Shunsuke

俺がこのベルトを手にしたのは、ほんの偶然だった。

古代の遺物とかそういうのに興味を持っていた俺は、よく親父に連れられて近所の考古学博物館なんかで、そういったものに触れる機会が多かった。

その中に、俺はある日、1つの古ぼけた輪のようなものを見つけた。

今思えばそれが、俺の？非日常？が？日常？へと変わってしまっ、前触れだったのかもしれない。

「おわー、凄えー……………！」

昼下がりの博物館に、ショーケースに輝くような熱視線を注ぐ少年が1人。

小野寺駿介、小学生。

考古学そのものに興味はないが、古代の遺物を見るのが好きな風変わりな面を除けば、極々普通の男の子。

数年前のアニメで、古代の遺物を蘇らせた主人公がそれに選ばれ、世界を滅ぼそうとする邪悪な意思と戦う、などという内容のものにはまってから以後、彼はすっかりこの博物館の常連だ。

彼が主に見るのは、刀剣類や鎧兜、そして鉄砲等の火器類。その趣味はやはり男の子だろう。無論、その辺りの趣味に彼が見たアニメが影響を与えているであろうことは言うまでもない。

しかして今現在、その駿介少年の目を離さない遺物が、古ぼけた、しかし錆びつきを感じさせない光沢を放つ剣である。

「凄いやなあ。昔の人は、こういうものを振り回して戦ってたのかあ……………」

小学生ながらそんなことを呟いて悦に浸るユウスケ。

実際には、彼が見ている剣は、当時主に祭礼用に用いられたものであり、戦いに用いられることはなかった。

それを何故彼が知らないのかと言えば

答えは至極簡単、

彼が歴史には興味がなかったというだけの話である。事実、この博物館には歴史的発見を成した書物や磁器といった貴重な品々が数多く出典されているのだが、彼は目にもくれようとはしない。

要は、昔の人が使っていたカツコイイ武器。その事実が重要なのである。

「やー、駿介君。今日も来たね？」

しばらく刀剣の不思議な光沢に見ほれていると、いつの間にか隣に立っていた女性から声を駆けられる。

「あ、詩織さん。こんにちはー！」

手を挙げて元気に挨拶をする駿介に、詩織という白衣を着た女性は、おっす、などと言って笑みを零す。

茶に染まった長髪の毛先をゴムで纏め、滑るような白い肌はなかなかの美人で、彼女独特の性格もあってか言い寄ってくる男性は少なくないとか。

そんな彼女がしているのが、この博物館直属の研究員。常連の駿介とはかなりの頻度で顔を合わせる顔馴染みだ

「ほほう、やっぱりこいつを見に来たね？」

「そりゃそうだよ！ カッコイイなあ。俺もこんな剣で、戦ってみたいなあ……………」

「よせよせ。君がああ時代にいたって、碌に戦えもしないよ。本当の戦いってのは、本当に恐いものらしいからねえ」

「……………夢なくす上に、又聞き？」

「……………そういう君は、相変わらず可愛げがないねえ」

そんなことを言いつつ、笑い合う2人。
なんだかんだ言ってるこの2人、仲がいいのだ。

「さて、せっかく今日という日に来たんだ。少し、掘り出し物を見ていかない？」

「掘り出し物？」

相変わらず剣を食い入るように見つめつつも、話には興味があったのか耳だけは詩織の話へと傾ける。

「そ。最近長野の遺跡で発掘されたものなんだけどね、使い道が全くわからないんだ」

「変なの。そんなもの俺に見せてどうしようってのさ？」

「そりゃー勿論、小学生の駿介君からの素直かつフレッシュな意見を聞かせてほしいと思ってね」

ふうん、と、いつの間にか剣から詩織へ移っていた視線を再び剣へと戻し、駿介は解った、と頷いた。

「こつちだよ」

そう言っつて詩織が案内するのは、スタッフ用の通路。

本来ならば関係者以外は立ち入り禁止なのだが、詩織の独断で駿介だけは、彼女の同伴という条件付きで、立ち入りが黙認されていた。

そんなことをして大丈夫なのかと誰もが思ったが、詩織がこの博物館の研究チームの長である故、誰にも口出しできなかつた。

そうして連れてこられた一室。

そこは普段、運び込まれた遺物が展示される前に一旦保管される保管庫だつた。

煌びやかな印や書物等が並ぶ中で、部屋のちょうど中央に置かれたガラスケースの中に、1つの遺物が、まるで他とは一線を画すように鎮座していた。

「これなんだけどね」

「何かの………輪つか？」

ガラスケースの中に入っていたのは、古ぼけた石作りの輪のようなもの。

確かにこれは、科学者も用途の判断に困るかもしれない。

「何なんだろうね、これ。指輪にしては大きすぎるし、首飾りにしてもおかしいし。駿介君は、何だと思う?」

そう詩織に訊かれるが、対し駿介は、まるで縫い付けられたように遺物をじっと見つめていた。

その鈍く、しかし見る者を貫くように鋭い輝きが、駿介の視線を掴んで離さない。

そして。

(何だ……………?)

頭に、何かが流れ込んできたような気がして、駿介はそれをそのまま声に出す。

「アー、クル……………?」

「え?」

「あ……………ううん、なんでもない」

そう? と首を傾げて、詩織が今度はこれが見つかった遺跡について語っているが、駿介の耳にそれは殆ど入ってはこなかった。

尤も入ってきていたとしても、駿介には理解できないだろうし理解するつもりもないため、あまり意味はないのだが。

それはさておき、駿介は今聞こえてきた声が気になった。

アークル。確かに声はそう言ったが、そんなものは聞いた覚えもないし、駿介には当然、何のことやらさっぱり解らない。

「ちよつと、聞いてる？」

「はえっ？」

突然視界の中に呆れたような詩織の顔が入ってきて、駿介は意味不明な声を上げながら思考の海より舞い戻る。

「……………もう。人の話は聞くものだよ？ まあ、それだけこれがお眼鏡に適ったようだし、こっちとしては嬉しいことなんだけど」

見せたかいはあるしね、と微笑んで、詩織はどこかへ行ってしまった。

何でも、まだ整理し切れていない書類がデスクに山積みになっており、今日中に片付けなければならぬのだとか。

貴重な品が保管されている中に小学生を置いておくなど、無責任も甚だしいが、詩織も駿介が遺物を傷つけないことを知っているので、安心して置いておくことができるのだ。

「……………」

駿介は無言のまま、どんな用途に使うのかすら解らぬ環状のそれをショーケース越しに見つめた。

詩織の言うとおり、それは見事に駿介の興味を引いていた。

元来た道を戻り、エントランスホールに滑り込んだ、彼が見たものは。

「何だ、アレ……………!？」

無機質な、まるで古びた遺物のようなくすんだ色の肌をした、2本足の異形の姿だった。

その周りには、夥しい量の血を流し、倒れ伏す人々。

「未確認生命体……………!？ 嘘だろ、どうしてこんなところに……………!?!？」

未確認生命体のことは、ニュースで聞いて既に耳にしていた。だが、直に目にしたのはこれが初めて。

否、それどころか、未確認生命体などという存在も、所詮はテレビ画面の向こう側の世界であり、自分のいる場所、自分の世界が彼らに侵食されるなど、ありえないことだと思っていたのだ。それを目の当たりにした駿介のショックは、計り知れないものがある。

警備員、白衣を着た博物館のスタッフ、一般客。

様々な人が倒れ、また逃げ惑う中で、駿介は辺りを見回し、漸く目当ての人物を見つけることが出来た。

「詩織さん！」

結論から言えば、詩織はまだ無事だった。

しかし今彼女は異形と対峙している状態。襲われるのは時間の問題だろう。

「駿介、逃げて！」

あちらも駿介に気付いたらしく、大声で叫ぶ。

が、駿介は聞かなかった。

逃げて、詩織が死ぬのが嫌だったから。

近くに立て掛けるように展示してあった古い刀を取ると、抜き放つ。

「ぐ、重っ……………」

思ったよりも重い鉄の重量に、前のめりになりそうになるのを何とか堪える。

「戦国時代の人達は、こんな重いのを振り回して戦ってたのか……………」

詩織さんが無理だっけ言うわけだ、と1人ごち、迷うことなく駿介は駆ける。

そうして、刀をなんとか持ち上げて大上段から振り下ろす！

「ガ？」

命中した。

だが、効いている様子はない。

そのお返しだ、とばかりに、未確認は左手を構え

「！ 危ないっ！！」

振り下ろした。

「がつ！？」

衝撃に駿介は、上に覆いかぶさった人物ごと吹き飛ばされる。

「ぐっ、うう……………」

「だ、大丈夫？」

「うん、なんとか……………え？」

呻く駿介に覆いかぶさるようにした詩織から、苦しげに喘ぐような
声音で声がかけられる。

それに答え、頭を押さえようとして

駿介は固まった。

それは何故か。

手に付着した、紅い液体が見えたから。

それは何か。

誰かの血だ。

誰の血か。

誰の？

そもそも詩織は、何故倒れる自分に、覆いかぶさって。

「がふっ……………」

「し……………詩織さんっ!?!」

夥しい量の彼女が吐いた血が頬を、服を染め上げ、駿介は漸く、未確認の攻撃から彼女が自分を庇ったのだと理解する。

「詩織さん、詩織さんっ!?!?!」

激しく揺らして彼女へ呼びかける駿介に、未確認が迫る。

ゆっくりと、しかし勝利を確信した足取りで。

駿介はそれに気付き、最大限の憎悪を込めて睨みつける。

「お前が……………お前が、詩織さんをおおおおっ!?!」

咆哮する駿介。

普通なら、彼のような少年に、力などありはしない。
どれだけ夢見たところで、どれだけ欲したところで
まだ、大人に守られるべき子供に過ぎないのだ。

彼は

だが　この少年は違う。

「グガガガッ！」

奇声を上げ、襲い掛かる未確認。

だが。

「グガッ!？」

突然、白く輝く何かが彼の横からその異形の身体を突き飛ばした！

「え……………」

何が起きたのか解らず、駿介は白く輝く？それ？をじっと見ることに出来ない。

やがて、その正体が先ほどのショーケースの中にあつた遺物であることが解ると、余計に訳が解らなくなった。

遺物がひとりでに、勝手に動いてショーケースを飛び出したばかりか、目の前で今正に自分を襲おうとしていた異形を吹き飛ばしたのだ。冷静でいられる方が不自然かもしれない。

すると。

「……………っ!？ また、声が……………!？」

駿介は詩織の身体をどかし、立ち上がると未だに白い輝きを放っている遺物へと向き直った。

「我を、纏え……………お前か、この声は……………お前なのか？」

駿介の言葉に応えるように、明滅する遺物。

「……………そうか。お前を使えば、あいつをやっつけられるんだな……」

言うと、再び遺物は鼓動を発する。

それだけで、駿介は全てを理解した。

手をぱつと伸ばし、遺物を引つつかむ。

理屈など関係ない。

これを使えば、未確認を倒せる。

自分達の命を 守ることが出来る。

遺物は駿介の手に徐々に吸い込まれていき やがて、光と

共に腰に装着された。

そしてそのまま、それと同じ光が駿介の身体を包み込み 。

「グ……………ゴガアアアアアアアアア！」

起き上がり、再び襲い掛かろうとした未確認の身体を 。

「ゴアアアアツ!？」

吹き飛ばした。

光が収まると、現れた駿介の身体はその全てが変わっていた。

身体は黒のボディスーツに覆われ、胴には筋骨隆々な戦士の肉体の如き白い装甲。

紅く大きな複眼の上には、小さく飛び出た三本ヅノ。

仮面ライダークウガ、グロージングフォーム。

？白きクウガ？と呼ばれる戦士の、誕生の瞬間だ。

「な、なんだこれ……………」

姿が変わったばかりでなく、標準的な成人男性程までに成長した自分に困惑する駿介。

そんなことをしている間に、未確認が再び向かってきた。

その強靱な身体で右拳を繰り出す。

「うわっ!?!」

咄嗟にかわす、クウガGF。

「グガッ!?!」

避けられたことに驚愕し、未確認が声を発する。

だが、一番その反射神経に驚いていたのは駿介の方だった。

反射神経だけではない。その反応に遺憾なく働いて見せた筋力、身

体のばね、そのどれもが、少年、駿介であった時のそれを遥かに凌駕していたのだ。

「はあっ！」

拳を繰り出す。

躍動する筋肉が常人ならざる力を引き出して、異形の鳩尾にめり込んだ。

「グギヤアアアッ!？」

初めて悲鳴らしき悲鳴を上げて、異形は数歩後退する。

だが。

「ガアア！」

「何!？」

所詮、不完全形態。

力は感全体である赤のクウガ、マイティフォームにも及ばず、そのため未確認に致命傷を与えることも叶わない。

それでも。

「あああああああっ！」

向かっていくしか、ない。

それが己を

大切な人を守ることになるのなら。

未確認の繰り出すパンチをかわし、クウガGFは反撃する。

ストレートやジャブを繰り返し撃ち込み、最後に強く蹴り飛ばす。
未確認は吹き飛ばされ、物影に放り込まれた一瞬について、その姿を消してしまった。

「……………はあ、はあ……………」

荒い息を整えながら、駿介は元の姿へと戻った。

しばし呆然とした後、はっとしたように、うつ伏せに倒れている詩織へ駆け寄った。

「詩織さん、大丈夫!？」

「ひっ……………」

駿介が近寄ろうとすると、それに気付いた詩織は思わず小さく悲鳴を上げて後ずさる。

はっとして顔を上げるが

もう、遅かった。

「あ、いやその、これは……………」

怯えた。自分の異形の姿に。

それが解っているから、駿介は何も言わない。

ただ、悲しげに。

「……………さよなら」

別れを告げ、踵を返す。

後ろで彼を呼び止める声が聞こえるが、駿介は立ち止まらない。

結局家に帰るまで　　駿介は一度も後ろを振り返ることはなかった。

それから3ヶ月。

駿介は、自宅で元の通りの生活を送っていた。

あれから、博物館へは行っていない。

詩織に会うのが怖くて。否定されるのが怖かったから。

怖がらせてしまったことを謝らなければならぬとも思うが、それでは仕方ないと、行く勇気が出なかった。

ついでに言えば、あれから身体にも特に異常は出ていない。

未確認にも遭遇することはないし、あの異形の姿に変身することもない。

非日常に片足を突っ込んでしまった駿介だったが、ここまでは何もなく、日常を過ごすことが出来た。

そして、12月。

クリスマスのその日、駿介を完全に非日常の地獄へと突き落とす、運命の日がやってきた。

「あいつは……………!？」

ディケイドは、少年のことが解らなかった。

ただ、少年がグロンギに襲い掛かった、それだけはようやっと理解する。

「なんて無茶を……………！」

夏海はそう呟いて、キバーラを呼び寄せようとして
止めた。

これは、記憶の世界。

この世界の人には触れることも出来ない自分が変身したところで、彼を助けることは出来ないと感じいたのだ。

ぎゅっ、と手を握る力を強めるデイケイドと夏海。

しかしこの後すぐ、2人はその心配が杞憂であったことを知る。

「うう……………ああああああああああつー！」

激しく叫びを上げながら、グロンギの身体を殴りつけていく少年。

その彼の身体が、少しずつ変貌していく。

全身を覆う黒いボディスーツ。

その更の上、胸を覆う脈打つ筋肉のような逞しさを呈す装甲は、燃えるような赤。

更にそれと同じく真っ赤に染まった大きな複眼の上には、黄金の3本ツノ。

仮面ライダークウガ、マイティフォーム。

ユウスケと全く同じ姿に変身した少年は、グロンギを殴りつける。

奇声を上げてグロンギが仰け反れば、少年が追撃をかけ、向かってくれば返り討ち。

少年は尚も怒りと憎しみに狂ったような悲鳴を上げて、グロンギを殴り続ける。

「あああああああああああああつ！」

「駿介……………」

「あれが……………駿介だと？」

ユウスケの変身したクウガの呟きに、デイケイドは驚愕とともに、納得したような言葉を漏らす。

「そうか。だから海東の奴、あんなことを……………」

海東は彼との旅の間、ユウスケの次に駿介に懐かれていた人物だ。

彼の記憶を知っているなら、この世界を地獄と表現したのにも頷ける。

この後の結末を、知っている者であれば

「あああああああああつ！」

やがて戦いも佳境へ入り、倒れ伏すグロンギへ向けて構えるクウガMFの右足に、燃え滾る封印エネルギーが宿る。

その荒々しいエネルギーの凄まじさたるや、マイティフォームの標準を大きく超えていた。

そのまま、クウガMFは駆け出し
右足を、グロンギの腹
へ突きたてた。

「グガッ!?!」

悶絶するグロンギの身体を封印エネルギーが走り、ベルトへ到達すると同時に、粉々に爆散する。

戦いが終わり、憎しみの限りを放出したクウガは
咆哮を
上げながら、ゆっくりと駿介の姿へと戻っていった。

すると。

チャッ。

「!?!」

いつの間にか起き上がっていた父親が立ち上がり、金属バットを持ち出して駿介へと殴りかかった。

「危ない!」

夏海が叫ぶが、悲しいかな、こちらの声は駿介には届かず、金属バツトが無情にも駿介の背を捉える。

「がつ……………!?!?」

何が起こったのか皆目検討がつかない、そんな呆けた顔で駿介は前のめりになりそうになったのを何とか堪える。

そして後ろを振り向くと、その先には怒りと恐怖をない混ぜにしたような、今までの人生で見たことのないような表情をした父がいた。

「おや……………」

「近寄るな!」

親父、と歩み寄ろうとした駿介に、父は冷酷にも突き放す。

だが、尤も残酷なのはその行為ではない。

「近寄るな、化け物!」

「っ!?!?!?」

言葉だった。

「私は……………私はお前のような化け物を息子として育てた覚えはない! お前は誰だ……………駿介はどこだ!?!?!?」

「お、俺だよ父さん! 俺が駿介だよっ!?!?!」

「違う！ 駿介が……駿介が、お前のような化け物で……あるものかああああああっ！」

バットで襲い掛かる父に、戦慄する駿介。

もはや自分の声は届かないのか。

そう絶望する中で。

「がっ……………」

手が、まるで自分の制御を離れたかのように勝手に伸び、拳が、父の鳩尾にめり込んでいた。

小さく呻きを上げ、細かに痙攣した後、気絶したのか父親は駿介に覆いかぶさるように力なく意識を手放した。

「……………」

何言も発さず、ただ黙してそっと父の身体をフローリングの床へ寝かせると、駿介は酷くやつれたような目で玄関の開けた虚空をじっと見つめる。

そこには夏海がいたのだが、この世界に交わっていない彼女が駿介に見えるはずもなく、彼の目に見えるのは、鉛色を湛える曇り空だった。

今にも一雨きそうだった。

だが、そんなことを気にしてられる余裕は駿介にはない。

もはやこの家に、駿介がいられる空間は どこにもないの
だから。

駿介は、覚束ない足取りでふらふらと家を出た。

行き先などどうでもいい。

ただ 早くここから離れたかった。

この、多くの思い出が詰まった家から。

早く出ないと 頭がパンクして、どうにかなりそうだった
から。

悲しみに打ち震える心の余裕もない駿介には、ただ脚を動かすこと
しか出来なかった。

「これが……………あいつの過去」

ディケイドへの変身を解いた士は、道を呆然と歩いていく駿介の後
姿を見やりながら、苦虫を噛み潰したような表情でそう呟く。
夏海とユウスケの2人も同じような表情をしていたが、ユウスケは
他の2人とは違い、他に浮かんでいる感情があった。

それは 怒り。

「どうしてだよ！ どうして今更、俺達にこんなものを見せるんだ
！！」

「ユウスケ……………」

皆を笑顔にしたい。

今この時、この記憶の情景が映し出されている時点で、駿介がこの記憶に関連するなんらかのよからぬ事態に陥っているであろうことは、自明のことだ。

「……………行くぞ」

「……………土君？」

突然脈絡もなく歩き出す土に、訝しげに夏海は問う。

土は立ち止まり、振り返らずに言った。

「行くぞ、ユウスケ。あいつのところに」

「土……………」

「そこまで言うなら自分で確かめろ。あいつの思いを。記憶を。ぶつかり合って、何度でも確かめてやればいい。それだけが、お前の取り柄だったろ？」

彼にしては珍しい静かに諭すような口調で手を出す土に、ユウスケは目を見開く。

そつだ。

相手の笑顔を取り戻すまで、何度でも諦めずにぶつかり合う。

自分のいたクウガの世界でも、それに似たアギトの世界でも

ライダー大戦の世界でも。

土が世界の破壊者を受け入れたその時も、それだけは変わらなかつ

たではないか。

そしてその度に、何度でも勝利を掴み取ってきたのだ。

「……………ああ。行こう、士！」

決意の眼差しで手をとるユウスケに、士もまた不敵に笑う。

目指すは、写真館。

？クウガの介入の世界？へ、再び破壊者が降り立とうとしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6442p/>

仮面ライダー×仮面ライダー クウガの介入&ディケイドAMW NOVEL's 大

2011年1月4日04時31分発行